



登米市総務部  
星 茂喜 危機管理監

### 災害の記憶を風化させず 危機管理体制を強化

大規模災害が発生した際に、命を守るためには、「自助」「共助」「公助」の3つが必要だといわれています。

自助とは、家族を含む自分で命を守ること。共助とは、近隣が互いに助け合っ

て地域を守ること。公助とは、市町村をはじめ警察・消防・ライフラインを支える事業者などによる応急・復旧対策活動のことをいいます。

「阪神淡路大震災で生き埋めになった人たちが、誰によって救出されたか」という調査（出典：(社)日本火災学会「兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」）があります。救出された人のうち、68%が自力や家族による「自助」、28%が近所の人や通行人などの「共助」、救助隊による「公助」はわずか2%程度でした。このことから、自助、共助の重要性が分かります。

自助力と共助力を、より高めていく備えの一つが自主防災組織です。しかし、結成しただけでは意味がありません。普段から飲料水や保存食を準備したり、救急救命処置や避難所運営の訓練をしたりするなど、日頃からの活動が、有事に動ける組織になるのです。

また、私たち行政の公助も同じで、日頃からの備えが非常に重要です。皆さんの命が助かった後、災害時の「非常」から、いつも通りの「日常」に戻す対応策を迅速に進めなければなりません。

市では東日本大震災後に「災害対応マニュアル」を作成。大規模災害時の基本的な対応法を「目に見える化」しました。職員全員がマニュアルを熟知するだけでなく、突発的な問題に対応できる実効性のある危機管理体制を築いていかなければなりません。

常<sup>じょう</sup>に代<sup>だい</sup>替<sup>か</sup>案<sup>あん</sup>を準<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>  
09年の台風18号での水害では、横山地区の指定避難所は横山小学校となっていた。川が決壊した情報を受けた佐々木光男さん（横山5区）は、追町に子どもを車で迎えに行つた。途中、自宅に連絡をする



停電で、電話や防災無線が使えない中、情報配信と確保に活躍したアマチュア無線。

と、床上浸水の恐れがあると、床にいた家族は、道路が寸断され、身動きが取れなかった。子どもを安全な場所にと横山小を目指したが、増水で道路が寸断。結果的に、雨足が弱まるのを待ち、東和町から南三陸町を経由し自宅に戻った。

## 一人一人が災害と向き合い 備えを強化することが 「自守防災」につながる

仮に防災行政無線も、エムも、メール配信サービスも使えない場合は、トランシーバーやアマチュア無線などの利用が有効だ。

アマチュア無線は、東日本大震災時に市災害対策本部協に設置し、情報の確保や発信に大いに役立った。トランシーバーは、自主防災組織での設置が増えてきている。上沼コミュニティ運営協議会の浅野会長は「中継をすれば、地区内全域で受発信できることが分かった。早い段階で全行政区分準備したい」と整備を急いでいる。

指定避難所が使えなくなることも想定しなければならぬ。前述の佐々木さんのように、備えを強化していくこと。これが自主防災組織の体制強化、「自守」につながっていく。

## 地区コミュニティで水害訓練を実施 情報伝達手段と地域の連携が課題

上沼地区は、北上川沿いに位置しています。幼少の頃、カスリン台風で大泉堤防が決壊。被害はほぼ中田町全域に及び、多くの犠牲者が出ました。このことから、一昨年末に市の協力を得て地区全体のハザードマップを作成。避難所や避難経路は、各行政区の役員と現地を確



ハザードマップには、情報入手先や浸水状況の目安などが、詳細に書き込まれている

認し決めました。地元に住んでいる人間だからこそ分かることです。

訓練を地区全体としたのは、災害時に単独の行政区だけでは、現場対応できないことを想定したからです。また、訓練は動きを確認するためだけではありません。「課題をあぶりだす」ためです。どんな課題があるのかは、実際に動いてみないと分かりませんから。

複数上がった課題の一つとして、家中では防災行政無線が聞こえにくいということです。最近建設された住宅は、機密性と防音効果が高く、外からの音が聞こえづらい。災害時の情報提供は非常に大切なもの。行政には、このあたりの対応をお願いしたいですね。

大規模な災害の場合、防災無線やコ



浅野 盛志 会長  
(弥勒寺北)

ミュニティエフエムなどが使えなくなることも予想されます。これに対処するため、現在、全行政区に1台ずつトランシーバーの設置を予定しています。今後は、アパートなど移住した人たちとの連携をどのように取っていくかが課題です。

## 上沼コミュニティ運営協議会

## 市内の先進団体に聴く

### 迫町鉄砲丁行政区

### 古里を守るため訓練を50年以上継続 顔が見える普段付き合いが命救う

鉄砲丁区は住宅が密集しています。火事が起きたら、地域全体が焼失する恐れがあります。このことから、昔から防火意識が高く、訓練を実施してきました。50年ほど前に防火訓練が始まり、現在は防災に重きを置いて訓練をしています。

訓練は、基本的に内容を変えていませ



燃える小屋をバケツリレーで消火。訓練は全て手作り、小屋も自分たちで製作したものだ。

ん。多くのことを覚える必要はありませんが、災害時に、すべきことをしっかり覚えてもらうためです。災害は、いつ起きるか分かりません。毎回同じ人が集まれるわけではないので、その場にいる人たちで、さまざまな役割を果たさなければならぬのですから。

東日本大震災では、発生から15分後に梅ノ木公園へ集合し避難所を開設。テントの設置や炊き出しを始めました。平日屋間だったので、高齢者や専業主婦などが中心。それでも混乱することなく、避難所を運営、地域住民の安否確認ができました。普段からの訓練と、顔の見える人付き合いが実を結んだのだと思います。

当行政区は、移住者などが非常に多い地区。若い世代が多く、地域交流を望まな



島谷 俊雄 さん(左)  
澤口 良夫 さん(中)  
佐藤 傳 さん(右)

い人もいます。しかし、命を守ることが最優先と、災害時用の名簿作成に協力いただいています。守るべきはプライバシーより命ということです。

今後は、近隣の行政区と連携した災害対応の準備をしていく予定です。